
FAIRY TAIL 虹色の銃士

作者月詠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

FAIRY TAIL 虹色の銃士

【Nコード】

N94330

【作者名】

作者月詠

【あらすじ】

崖崩れで死んだはずの俺は、いつの間にかドラゴンに育てられていて……！？FAIRY TAILに無自覚転生物語！

第零話 『彩竜と記憶』（前書き）

この小説には

- ・俺TUEEEEEEEEE!要素
- ・弱チート要素
- ・エルザン、ルーシィン摂取要素
- ・ガンⅡカタ要素
- etc...

を含みます！
ご注意を！！

第零話 『彩竜と記憶』

物心付いた頃には明らかに人じゃない何か…いや、ドラゴンか。

名は確か…そう、『【彩竜】のドレニクス』。

最初は赤、次の日に黄色と…彩竜の名に相応しい（？）決まった色が無いらしい。

今オレの年齢は五歳。

そこで『前のオレ』の記憶が入ってきた。

『前のオレ』の名は齊藤 さいとう 夏目 なつめ。
享年21歳。

死因は地震による崖崩れに巻き込まれて生き埋め。

その記憶から、オレの『世界』は『FAIRY TAIL』と分かった。

そしてその知識から、オレは本来原作に居ないイレギュラーな存在だと知った。

元が21とは言え、現在五歳の精神にはかなり応えた。

…まあ、要は大泣きしてしまったのだ。

飯の調達から帰ってきたドレニクスは焦る焦る。

本人曰く遺失魔法の体変換魔法という魔法で藍色の髪と眼の女性に…
…って女性！？
ロストマジック
ボディコンバート

…とりあえず抱かれて背中をポンポンと宥める様に叩かれた。

今現在を合わせて16年間会っていなかった母親を思い出した。
…今回ばかりは思いっきり甘えよう。

今回で我が儘は最初で最後だなあ…

「今日は…一緒に寝て」

e n d . . .

第零話 『彩竜と記憶』（後書き）

次回予告！

主「ついに登場だな！」

作「こんなに作品書いて大丈夫だろうか…（ガタガタ）」

主「漫画やゲームの数だけお前の妄想があるからな。それも手書きじゃなくてこういう場所だな」

作「抑え切れないのだよ！（キリッ）」

主「所謂自己満足だな」

作「おうさー！」

主&作

「次回、第一話『別れと妖精の尻尾』！」

第一話 『別れと妖精の尻尾』（前書き）

ついに原作キャラ登場！
一人だけだけど（汗）

第一話 『別れと妖精の尻尾』

あの記憶の復活から七年…ドレニクス…レニーによる魔法指導により、結構な数の滅竜魔法というのを学んだ。

…いや、ドラゴンが滅竜魔法教えるってどうなのさ？

まあ、レニーからお金を貰って今度は魔法用の銃火器（銃魔器？）を自由を買って、今度は『換装』を学んだ。

そして……

――11歳…（777年七月七日）

「レニー！肉屋のおばちゃんってばまた鶏肉分けてくれたよ！」

「あのババア…アタシが翼竜種ワイバーンタイプと知っててまたコイツに渡したな…？文句を言っても仕方ない！今日はお前が調理しな！」

「『今日は』…って、八割方オレが調理してんじゃん！（汗）」

「修行だ修行！！今日は火、氷、風だ！」

「あー…なるほどね。よっし！期待してるよレニー！！」

おっしゃー！と言いながら調理に向かうオレは、後ろで酷く悲しそうな表情のレニーに気付けなかった…

「よし、今日の晩飯は合格！満点だ！」

「ついに満点だぜー！キャッホーウー！」

今まで…

「微妙」

「薄い」

「素材への冒涇だ」

…だの言われ続けて七年間、漸く満点だ…！

「オイ」

喜んで騒いでるオレに真剣身のある声色でオレを呼ぶレニー。

「な、何…？」

「アタシは…ある場所に行かなければならなかった」

「…何日で帰ってくる？」

「……………分からない」

レニーは依然と顔を伏せたままだった。

「何処に…行くの？」

「……………教えられない」

薄々は感付いている。

だが、オレは認めたくなかった。

「また冗談でしょ？ねえ…」

「……………」

ついに沈黙。

それに、「冗談だ」というオレの声は震えていた。

—ゴオオオ
…

沈黙の後、レニーは本来の竜の姿に戻る。

大きさにより、レニーの俯いていた顔が露になる。

「…ッ！」

その顔は、涙で濡れていた。

レニーは前足と一体化している翼を振り上げて、オレに振り下ろす。

―ゴツッ―！

「嫌だ！オレはレニーと戦いたくない！！」

『五月蠅い！戦わなければ死ぬぞ…ッ！』

そして、曇天に包まれた夜空から雨が降り始めた…

「グッ…《水彩の、流壁》…！！」

オレの下から振り上げた二本の水柱はレニーの両前足の軌道を逸らし、両前足はオレの両脇に叩きつけられる。

『腹ががら空きだぞッ…！！』

「ゴフッ…！！」

レニーの竜の鼻頭でオレの腹に突っ込んできた。重たい石を叩きつけられる感じがした。

「ゴッ…ガハッ…！！」

『戦え！死を恐れ、生に執着しろ！そう教えたはずだ！！』

クソッ…クソックソックソッ…！

「うっああああああああっ！！」ニードルオーシャン《大海針山》ツツツ…！
「！」

地面から無数の水の槍を出す”『滅竜魔法』”を発動させるが…

『エアーズプレッシャー《空圧大枷》』

レニーによる滅竜魔法一歩手前の魔法にかき消され、同時にオレは地に伏せられた。

体全体を押し潰される感覚がオレを襲う。

『……………ンな…』

レニーが、何かを呟いていた。

『…ゴメンな…ゴメンな…』

「……………」

オレは…無意識に何かを呟いていた。

そして、その後の記憶は無かった…

Side out…

? Side・ドレニクス

??いつてらっしゃい、母さん??

コイツが、意識を失う寸前に言った言葉…レニーレニーと付いて離れなかったコイツからすればアタシは母親か…

それは嬉しくもあり、悲しくもなった。

アタシは誰の子も身籠ってないのにねえ?

しかしまあ、《空庄大枷》^{エアーズフレッシャー}でここら一帯がぺしゃんこだな…(汗

…まあ、いい。

突然あの意地^{火竜}つ張りが来て、「人への干渉をやめろ」だなんて…アイツとて子供を育てていたじゃないか。

あつとつと。

このままじゃコイツが風邪をひくな…

アタシはコイツを横抱き(俗に言えばお姫様抱っこ)にして風で雨を防ぐ。

取り敢えず、人里に行こう。
そしてコイツを誰かに預ける。

歩く途中、コイツとの日々が頭を駆け巡る。

？「あうゝ」『ああ、そっちはダメだ！って、危ない危ない！！』？
ハイハイであっちこっち行ったり…

？「とれにくしゅ？」『違う違う（汗 アタシはドレニクスだって』
？

舌足らずで上手くアタシの名が言えなかったり…

？「これが『まほー』か！スゴいなレニー！！」『れ、レニー？』
「ダメか？」『いや、いいよ。今度からそう呼びな』『うん！』？

初めて魔法を見せて、いきなりアタシの愛称を付けたり…

？「火や土もなかなかおいしいね！」『普通の人間には出来ない…
アタシら竜や竜に育てられた人々に特権さ！』？

初めて普通の食べ物以外を食べたとき…

？「何時になつたらレニーに勝てんだろ？」『どうして力を求める
んだい？』『だって、早く強くなってレニーをハンターとかから守
るのさ！』？

一人前に生意気言つて、コイツの夢を知ったとき…

コイツは本当のアタシの子供の様に育ち、育ててきた。

そして、止まつたはずの涙は、再び流れ出した。

そろそろ人里に…？

この強い魔力…そういえばコイツが言つてたな。

「フェアリーテイルって言う魔道士ギルドのマスターが来る」って。

…決めた。

目の前には子供サイズのジジイ。

「アンタが魔道士ギルドのマスターだね？」

「いかにも。ワシが『フェアリーテイル』のマスター、マカロフじゃ」

「マカロフ、アンタに頼みがある…この子を、頼む」

「子供じゃと…？ヌシは一体…」

「【彩竜】、そう呼ばれてるよ」

「オヌシがドレニクスじゃと！？ではもしや、その子供は…」

「拾ったのさ。これから、アタシはコイツの元から離れなきゃならない…あの馬鹿^{火竜}を説得しなくちゃな」

コイツには魔道士の資質がある。

妖精の尻尾なんて面白い名前を付けるギルドには、コイツには丁度いいかもしれないな。

「頼みは聞けない」

「なっ…！」

このジジイ…！

「じゃが！」

「…！？」

「『預かる』ことは出来る。そのうち、コヤツを引き取りに来るのじゃぞ」

……………。

「…わかった」

「そうじゃ、コヤツの名は何じゃ？」

「『ジノ・ドレクス』だよ。じゃあな、妖精ジジイ」

言葉の途中で竜形態に変化。

そしてアタシは、ジノとマカロフジジイから離れて行った…

…またな。アタシの息子^{ジノ}…

e n d

第一話 『別れと妖精の尻尾』（後書き）

次回予告

ジ「ようやくオレの名前が出たな！」

作「魔法も幾らか出たな。ちなみにジノの魔法は《。。。彩の。。。》ってな感じと銃魔法で構成されています」

ジ「虹じゃ語呂悪いしな」

作「ついでにネタバレ。」

ヒロインはエルザ。一矢？誰それ？」

ジ「ルーシイは憧れ程度か（ペラペラ」

作「あ、ちょ！勝手に設定見んな！」

ジ&作

「次回、『妖精の尻尾』！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9433o/>

FAIRY TAIL 虹色の銃士

2010年11月23日02時31分発行